みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

No.11

平成19年3月1日
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL0930－33－4666
FAX0930－33－4667

歴史を学ぼう！文化にふれよう！

歴史講座受講生募集

博物館では新年度からの「歴史講座」受講生を募集しています。

「歴史講座」には、漢詩文講座、古典かな講座、古文書講座、初級古文書講座、みやこ学講座の各コースがあります。受講希望の方は、お気軽に博物館までお問い合わせください。

なお、継続して受講される方は、あらためて申し込みをする必要はありません。

講座の内容

【漢詩文講座】
○講師　宮原加代子先生
○内容　「和漢朗詠集」（平安時代中期の詩歌集）など古今東西の漢詩文を読みながら、日本の風雅な情の源をさぐり、味わいます。初心者の方も大歓迎です。
○実施日　毎月第1木曜日
午前9時30分～

【古典かな講座】
○講師　宮原加代子先生
○内容　細川幽斎「九州道の記」など、日本の古典文学を手習いしながら鑑賞します。初心者大歓迎！用紙と鉛筆あるいは筆ペンをご用意ください。
○実施日　毎月第2木曜日
午前9時30分～

【古文書講座】
○講師　当館学芸員　川本英紀
○内容　江戸時代の人が「くずし字」で書いた手紙や日記などを解読します。特に、みやこ町に関係する古文書を、歴史的な背景について解説をまじえながら読み進めます。
○実施日　毎月第2土曜日
午前10時00分～

【初級古文書講座】
○講師　当館学芸員　川本英紀
○内容　古文書解読の基本を学びます。最初は難しいかもしれませんが、継続すれば必ず読めるようになります。ゆっくり、丁寧に進めますので、初めての方でも大丈夫！
○実施日　毎月第4金曜日
午前10時00分～

【みやこ学講座】
○講師　当館学芸員
○内容　一つのテーマで郷土の歴史・文化・民俗をさぐります。
今年のテーマは「山」。座学と見学会を交互に実施します。
○実施日　毎月第3日曜日。実施時間はその都度お知らせ致します。

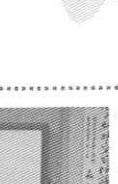
◀2／4博物館友の会文化講演会　講師　森弘子先生

博物館友の会　会員募集！

博物館友の会では、平成19年度の会員を募集しています。バスハイクや講演会、史跡めぐりウォークなどにあなたも参加してみませんか？現在の会員数は約220名ですが、より多くの方々のご入会をお待ちしております。

♪年会費　個人会員3,000円／家族会員1名につき2,000円
♪入会方法　博物館の窓口で随時受け付けています。

《古文書解読コーナー》

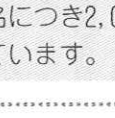
①

〈ヒント〉親しい人、親しくない人

②

〈ヒント〉日本家屋にはある

③

〈ヒント〉許す

④

〈ヒント〉手数がかからない

⑤

〈ヒント〉病気をなおす

◎答　え
（反対向きに見てください）
①親疎（しんそ）　②晋（ばんぐ）　③赦免（しゃめん）
④手軽（てがる）　⑤施薬（せやく）

みやこの「お宝（文化財）」拝見⑪

福岡県指定文化財

「生立八幡神社山笠」行事

【所　在　地】みやこ町犀川生立七番地ほか
【所　有　者】生立八幡神社山笠保存会ほか奉納各区
【規模・構造】舁山六基と曳山二基の八基からなる。何れも高さ約一五ｍ、重量約四ｔの規模がある

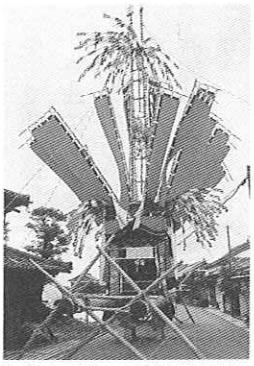
犀川地区を代表する祭り

「音に聞こえし犀川夜市（＝神事）さま（彼氏）と手ひいて参りたい」。昔からこう言いならわされてきた犀川神事こと生立八幡宮神幸祭は毎年五月第二日曜を最終日とする三日間繰り広げられ、犀川地区を祭り一色に染めあげます。この祭りの呼び物はなんといっても、その迫力が圧倒的なことで知られる山笠行事です。県下でも随一といってよいこの古風を伝える山笠行事の特色を簡単に紹介してみましょう。

▲祭り当日、神社前の馬場に勢揃いした山笠

神幸祭と山笠の歴史

山笠が奉納される神幸祭自体は、お宮が現在地へ移転した治暦三年（一〇六七）から始まったと伝えられています。神社のご祭神（八幡様＝応神天皇）が最初に祀られたとされる犀川大村の立屋敷には二子石とよばれる霊石があり、ご祭神にとってはここが「実家」であるとともに一種のパワースポット（神通力の供給源）となっています。ご祭神は年に一度ここに「里帰り」することで、新たな命を蓄えてリフレッシュ（「みあれ」ともいう）し、ムラの平安を保つエネルギーを回復するといわれています。そのご祭神の里帰りに随行するお供の神様たち（＝生立社を犀川総鎮守と仰ぐ村々の産土神）の乗り物として設えられた装置が山笠の始まりとされます。その装置は当初「柴山」とよばれる、神輿状の担い棒に大きな「ホテ」と呼ばれる藁束をのせ、これに榊を挿したごく簡単なものであったといわれています。これが時と共に様々な風流（飾り付け）が加わり、担い棒が大八車に、ホテがやぐらへと変化し、ついには現在のような山笠へと「進化」したとされています。進化の様子をはっきりと物語る詳細な記録などは残されていませんが、断片資料や各地の古い祭りとの比較から、現在のような形になったのは江戸時代初め頃と考えられます。したがってその変化の時間たるや数十年・百年単位のかなりゆっくりとしたものだったようです。



▲曳山（左：続命員区奉納）と舁山（右：谷口区奉納）

この祭りの時代的な変化を物語る資料は少ないのですが、江戸時代後期、享和三年（一八〇三）の記録には山笠に人形が飾られ、必ずしも現在見るような幟山笠ではなかったことが記されています。また奉納村も現在より少なかったようです。さらにその頃の奉納時期、現在でいう九月一日で、旧暦ではこれが八月一日＝朔日にあたることから、祭りの呼び名を「八朔神幸」といい、残暑厳しい中汗だくの山笠奉納が行われていたということが知られます。

現在の山笠のスタイル

さまざまな変化を受け入れつつ、山笠は今見るような姿へと変容したようですが、現在の姿はおよそ次のようなものとなっています。

まず種類として曳山と舁山の二つがあり、曳山は樹齢三百年級の巨木から作った直径一・五ｍほどの車輪を四つつけ、レンガ綱と呼ばれる大蛇のような綱に曳かれて動きます。続命院区と山鹿区奉納のものがそれで、前者は特に「親車」と呼ばれて山笠集団の先導を務めることになっています。また昭和三〇年頃までは、山鹿区の曳山が今川の流れを横断し、田川市の川渡り神幸祭にも勝るような壮観であったといいます。

▲山笠飾りの一つ「彫物」（左：力士・右：牡丹）

一方、舁山については幾分装いが異なり、車輪はなく、高さ五ｍほどの四本柱のやぐら造りの骨組みに、大棒とよばれる電柱並の巨大な柱を二本横にわたして神輿のように担ぎ上げるスタイルをとります。実際には大棒に直交する形で舁棒と呼ばれる横木を渡して力点とし、九〇人前後の人数でこれを担ぎ上げるのです。骨組みだけでも相当な重量なのですが、これに様々な飾り立てを施すことで一層の重みと荘厳さが加わります。緋色の幟やラシャの色引幕、ヤナギや彫物・御殿造の破風といったものがそれです。これに依代（神様のよるべ）として一〇ｍ以上ある柱二本（＝オオダシ・コダシ）を加えることで風流の限りを尽くした神の乗物としての山笠が完成します。

こうして完成した山笠は太鼓や鉦の音が響く中、木遣（音頭とり）の采配の下、舁手衆の息が揃って初めてその巨体を動かすのです。

▲担ぎ上げの瞬間、気合の叫びが響きわたります